

新年も一月の半ば、鏡開きも過ぎました。今年のお正月はたくさんのお餅を召しあがったことでしょう。

道元禅師が著された『正法眼蔵』には、“画”に書いた“餅”と書いて「画餅（がびょう）」と読む題名の巻があります。「画に書いた餅」と言えば、役に立たない物の喩えに使われますが、道元禅師はもっと深い意味に捉えています。

中国の唐代末期、香巖禅師の「画餅は飢えを充たさない」という言葉を引いて考察するのですが、画に描いた餅はもともと飢えを充たすものではないところから、たくさんの書物を暗記しても自分自身の中から出てくる言葉を持たなければ修行にならないという解釈から、道元禅師はさらに掘り下げてゆくのです。

この「画餅」の巻にはさまざまなお餅が出てきます。信州名物の“おやき”に近いものようで、野菜や牛乳、黍が入った美味しそうなお餅も登場します。これはおそらくはさまざまな人間の自己の生きている姿を表しているのでしょう。絵の具で描いただけの餅では、その内面から出てくる真実の香りや美味しさは伝わらないように、修行の中身には自己の内側から醸し出されてくるものが無ければならない。つまり、修行する者は自己から離れて外に真実を求めることはしてはならない、という一種の戒めを含んでいるようです。

画を観る時は、先ずはその画が伝えようとするものをそのまま受け取り、そして解説を読み、書き手が意図するところを推し量るといふ方が多いでしょう。仏様のお姿を描いた仏画はもちろん、お餅を描いた画にも、書き手のいのちの有り様を感じ取る細やかさで接したいものです。

仏画は仏様のお姿などを表現したのですが、そのおさとりに至る過程を画の中に見出そうと修行し、究めるべきであると、道元禅師は説いています。

更には、画を描き上げる過程をも修行に喩え、修行の力、すなわち自己の生きている全体で描き出す絵図に、修行の有り様とおさとりの姿が表れていると示されています。つまり「画餅」は、役に立たないものではなく、餅を描くということ自体が、大切な修行となるのです。